

# シヨールペンハウエル「恋愛の形而上学」の研究(上)

石 塚 勝 雄

× × ×

先ず、これまでの恋愛論や諺・言草などに現われた恋愛観を、主としてそれぞれの認識論的立場から、筆者未熟のまま及ばずながら、素描的に系譜づけて見ようと思う。というのは、第一に、本論は単なる学術論文ではなくして、後述するように青年読者諸賢の心に広い視野に立った独自の恋愛観が構築されることを念願し、云わば恋愛論巡礼の一齣として、シヨールペンハウエルの恋愛論を取り挙げた次第であるからである。第二に、それは彼の恋愛論を従来の恋愛論の中に位置づけることにもなり、その理解を助けることにもなるからである。

第一に、諺に「恋は思案の外」という。また、近代の日本のある文人は、「恋と死は人生の謎である」と云った。これらは神秘主義的であって、不可知論的乃至懷疑論的立場に立つ系譜に属する。

第二に、周知のスタンダールの恋愛論や精神分析学派のフロイドの恋愛論は、その所説は違うけれども、認識論的立場から云えば何れも等しく心理主義 (Psychologism) に属するものと云えよう。この立場を徹底するときは、心理的なものや生理的なものや外界の事情などによって、人間の心は躍らされていることになって、「恋愛」とは「滑稽」以外の何物でもないということになるであろう。尚、「結婚は恋愛の墓場なり」や「恋の味は失恋に在る」などは、その表現内容は全く違っているけれども、両者とも、禁欲の土壌に咲いた花が恋愛であると見ているわけであって、認識論的にはこの心理主義の系譜に属すると見てよいであろう。

第三の系譜は、プラトンの立場である。それはエロスの思想として、『饗宴』と『ファイドロ』に現われていることは周知の通りである。彼は、普通には、恋愛論の元祖のように云われ、いわゆるプラトニック・ラヴの語もそこから生れているわけであるが、恋愛を異性間の愛と規定する限りにおいて、それは誤りであろう。というのは、プラトニック・ラヴの対象は青年であったこと、また肉感主義の絶滅を志向するものとされているからである。さらに云えば、きわめて高遠な・永遠につながる・超人間的な・「哲人の抱く愛」とされている。何れにしても認識論的には、当為 (Sollen, oughtness) 思想の系譜に属すべきものであろう。尚、近代のロバート・ブラウニングの周知の「恋愛<sup>ラブ</sup>は最善なり<sup>イデ・ベスト</sup>」なども、この流れに属するものと見るのが適切なようである。

第四の系譜は、浪漫的恋愛<sup>ロマンチック・ラブ</sup>である。これは中世に全盛を極めたもので、或る学者によれば、それはさらに二つの流れに分れるとされる。一は、いわゆる吟遊詩人 (troubadour) の流れである。恋愛至上の感情を歌ったことにおいて古今無比であり、愛の対象が貴婦人 (既婚の) であったことが、その特徴である。他は、宗教的な愛で、前者が既婚の貴婦人崇拜であるのに対して、これは処女崇拜と結びつき、ダンテの『新生』と『神曲』がその代表作とされる。ダンテの愛の対象である処女ベアトリッチェは、神人としての女・永遠<sup>エターナル・エミニ</sup>の女性であり、その恋愛は一種の「祈り」であった。両者の共通点は、肉感主義の絶滅であり、この点においてプラトニック・ラヴと共通する。しかし、プラトニック・ラヴにおいては、女性性感性的なもの・抽象的思考の能力を欠くものとして、愛の対象からしりぞけられたのに対して、中世のロマンチック・ラヴは特定の婦人を崇拜する個人対個人の愛であった。これを認識論的に見るならば、恋愛の一要素であるロマンテシズムの面だけを過大視し、強調したものであって、科学未発達時代における全面的認識の欠如と云えよう。私達が、中世の恋物語などを一寸繙いただけでも、そこには実に清純な恋が画かれていて、現代人は資本主義のマンモニズムに毒されて、最早あのように清らかな恋は出来なくなってしまった、と私達を慨嘆させるほどである。しかし、その清純な恋の姿なるものは、基督教全盛・恋愛御法度の中世において、恋愛

を表現する唯一の止むを得ざる方法であつたと見る唯物論的見解がある。つまり、戀愛を神への信仰と同種のものとして表現することによって御法度を免かれたと見るか、又は戀愛の高貴性を強いて高唱することによって、戀愛御法度に対する間接の反抗を示したものと見るのである。

第五の系譜は、近代戀愛の立場である。その態度は、一言で云えば人間中心である。戀愛の要素である精神的な面と肉体的な面とを同等なものとして、両者を人格の力で融合させた「靈肉一致」の境地を唱える。未開時代は別として、いやしくも戀愛觀の發生以来、肉体の蔑視ということが近代に至るまでの特色であつたのであるが、この肉体の重視ということによって、ここに初めて戀愛は結婚と結びつくこととなつたのである。認識論的に見るならば、戀愛の本質を見究めると云うよりは、戀愛の作用に着目して、人間の目的論の体系中に包摂し、戀愛を手段化したと云えるであらう。しかし、人間の目的を何と考えるかによって、現実には大分色彩の違つたものが混在しているようである。人格の完成に資すると見る理想主義的なもの・生活享樂的乃至美的享樂的なもの・戀愛結婚による種族の進化を重視する母性主義的なものなどがある。要するに近代戀愛の認識論は、戀愛と人間を科學的に研究することによって、その間に法則性を見出し、戀愛を手段化して人間に役立てようとするプラグマテズムと云えよう。

第六の系譜は、古今東西において、諺・言草などの形で端的に表現されている戀愛觀である。これらのものは人々の生活体験の中から生れて普遍性を獲得したものであつて、認識論的に見れば体験的認識とでも云えよう。体験からにじみ出たものであるだけに、以上述べたどの戀愛觀よりも真に迫っていると思う。一方、その体験の異なるにつれて、また戀愛の如何なる側面をとらえたかによって、さらに戀愛につきまとう効果を説いたものなどもあつて、それらの表現内容は実にまちまちである。そういうわけで、それらのものが皆戀愛の本質を説いたものとは云えないのであるが、ここでは一応表現内容の種類によって区分して見ることにする。但し互に他を排斥す嚴密な区分ではなく、或る程度まで交叉することは止むを得ない。(尚、ここはショーペンハウエル戀愛論の序論に過ぎないから、事

例は最小限度に掲げる。)

(一)、病氣の一種と見たもの。「恋患<sup>こひぐ</sup>らい」・「恋の病に葉<sup>や</sup>なし」・“love-sick(ness)”

(二)、理性の喪失を説いたもの。「恋は盲目<sup>ラヴ・イズ・ブラインド</sup>」・「恋路<sup>こひぢ</sup>の闇」・「惚れて通へば千里も一里」・“Love and reason do not go together.”尚、相手を美化する作用(あばたも笑くば・Love idealizes its object.)なども、この

区分に入れてよいであろう。その根拠についてはショーペンハウエルが後述している。(本論集四四—四五頁)

(三)、偉力・魔力を説いたもの。「恋の重荷<sup>おもに</sup>」・「恋の奴<sup>やつ</sup>」・「恋の淵<sup>ふち</sup>」・「孔子も倒るる恋の山」

(四)、罪悪性を説いたもの。「振られて帰る果報者」・「尼寺へ行け、なぜ、男に連れ添って罪ぶかい人間どもを生みたがるのだ」(『ハムレット』から)

(五)、「曲物<sup>くせもの</sup>」と見たもの。これは日本の数種の文献に見える。謡曲「花月」にあるものは次の通り、「今の世までも絶えせぬものは。恋と云へる曲物。げに恋は曲物。くせものかな……。」

「曲物」の意味も種々あるようであるが、一応「表裏相反する二重人格的存在で人をだますもの」の意味に解するとき、結論的にはショーペンハウエルのもと甚だ似ている。しかも、前記「花月」の句は、当時流行の小歌から採ったものであることを考えると、大衆性を持っていたことを考える必要がある。西欧流に云えば「蚊は刺す前に歌う」“Die mücken singen bevor sie stechen.”の類か。

(六)、教育的効果を説いたもの。「恋は無常の種」・「恋せずば人の誠は知られまい」・「恋は、不恰好な学者どもに数等まさる人生の教師である」

第七の系譜は、形而上学的な認識論上の立場を取るものである。ショーペンハウエルの立場がこれであり、その意味については後述する。

最後の系譜は、恋愛非愛論である。先ず基督教の立場がこれであると思う。聖書は神の啓示の記録とされる。しか

し、人間に対して啓示されたものであるからには、人間の側から見れば、人生行路の指針でもある筈である。しかるに、凡ての人の人生行路に立ちはだかつて、激しい情熱を湧き立たせる恋愛については、殆んど口を噤して語らない、と云ってもよい。しかも、愛の宗教と云われる基督教においてである。それは、恋愛は愛<sup>アガペー</sup>(*agape*)ではないからだと思ふ。それを方法的に云うならば、(一)愛は神からのみ来るものであり、人間の心には湧かないものである。(二)恋愛は人間の心に湧くものである。(三)故に恋愛は愛ではない。

つぎに、愛を高次の道德と見る倫理学者や理想主義の系統に属する思想家達も、一般に恋愛を愛の一種とは見ない。それを、平易に、いわゆる「やりとり」(*give and take*)で説明するならば、愛はギヴ一点張りであり、恋愛は「惜しみなく愛は奪ふ」のように、テークもギヴに劣らずやるからである。なお、この見方は大和言葉にも現われている。すなわち、「恋ふ」は「乞ふ」と同源で、物欲しそうな心の態度と見られているからである。

× × ×

さて、シューペンハウエルの恋愛論は、彼の主著『意志と表象としての世界』<sup>(註一)</sup>の中の第四卷の補説中の一章(前巻の補説から章数が続いて第四十四章)「恋愛の形而上学」<sup>(註二)</sup>(*Metaphysik der Geschlechtsliebe*)として述べられている。「恋愛」の本質については、すでに見たように数多の説があるとしても、恋愛そのものは、多かれ少かれ殆んど凡ての人の体験の事実でもあるので、その概念の外延については余り問題はないようである。<sup>(註四)</sup>

つぎに「形而上学」の意味であるが、この語は周知の通り多義であるので、ここに用いられている意義を明らかにしておく必要がある。先ず最も通俗的・慣用的には超経験的対象の学を意味するようであるが、ここではその意味ではない。と云うのは、すでに述べたように、恋愛は殆んど凡ての人の経験的対象であるからである。しかも単に心理現象であるばかりではなく、現象形態としても、コーケトリや情話や恋文などの交換・嬉曳・接吻・馳落・心中等

々、何人も承認するところであるからである。ここで云う形而上学とは、価値とか規範とか当為とかに相對するものとしての存在、即ち現實に「ある」ところのものに關する究極的・体系的研究の意味である。この意味の「形而上学」が、哲学上の用法としても最も普通であり、この場合を平易に云えば、恋愛という經驗的對象を究極的に説明する、つまり超經驗的・形而上的原理で説明するの意である。約言すれば、對象が形而上的ではなく、方法が形而上的なのである。

さて、こうした經驗的對象の究極的・形而上的説明というふうなものを、何の必要があつてするのであるか。事實シヨープンハウエルがこれをしたのは何故であろうか。それは言うまでもなく、彼の有名な語「形而上学的要求」(Bedürfnis einer Metaphysik)に基づくものである。彼によれば、人間は宇宙・人生の根本原理を追求しようとする衝動、世界觀・人生觀を希求する要求をもつものである。そこで恋愛という人生の大問題もまた、この要求の「わな」にかかったわけである。恋愛のような、とりとめもないものは、學問の對象にはなり得ないと言う人があるかも知れないが、彼によれば、そこにもちゃんと宇宙大の原理が働いているわけなのである。

つぎに、ある哲學者が唱える形而上学的所説なるものが普遍妥当の眞理性を要求し得るものであるか。平易に云えば、シヨープンハウエルの説者である私達は、これを絶対の眞理として受取らなければならないのであろうか。これは哲學的思惟の訓練を経ている人達には幼稚な・入門的な問題でもあろう。また、恋愛論は人生哲學の分野に屬するであらう。しかし本論は主として「婦人問題」の基礎学としての研究であるので、<sup>(註五)</sup>讀者の中には哲學的思惟の訓練を余り経ておられない方も居られることが一応予想されるので、この問題に對する筆者の考え方を明らかにしておきたい。

カントが彼以前の形而上学を認識批判を欠くが故に謂わゆる「形而上学的独断」として排斥したことは有名であるが、認識批判の上に立つとしても、それはその哲學が体系付けられただけの話で、その認識批判なるものに普遍妥当

性がなければ、結局同じことになるのではなからうか。認識批判なるものは普遍妥当性を建前としているものであることは勿論であるとしても、認識論の立場は哲学界においても種々に分れている現状において、換言すれば凡ての判断はその認識主観の立場を前提とする限りに於いて、事実上独断と言ひ得るのではなからうか。シヨールペンハウエルも大体において、カントの認識論的立場をとるのであるが、それにしても結局同じことである。この問題に対しこれ以上仔細に深入りすることを止めて、筆者の結論を端的に云うならば、独断と云えば独断ということになる。そこで学説を唱える者の側から云えば、「耳ある者は聴くべし」ということになる。従つて読者の側から云えば、それを納得・承服するか否かの自由が残されているということになる。

前段のことから、次のことが云えるのではなからうか。すなわち筆者の見解によれば、或る形而上学に対する批判は、本来少ない筈のものと思う。というのは、それを納得・承服しないもの即ち別の立場から批判するのは、凡そ無意味であらうし、批判と云えば批判者が同じ立場に身を置いて、論理関係の誤り・矛盾や事実認識の誤を指摘する位であらうからである。そんなわけで、この論文も紹介・註解の色彩が濃くなり、批判の部分は少なくなるかもしれない。尚、批判の部分の少いもう一つの原因は、恋愛の事実認識の点において、シヨールペンハウエルも常識人と違ふところが殆んどないからでもある。

最後に附言したいことは、本論文を草するに當つて、敗戦後の日本の過渡的社會の中にゆさぶられている若き青年男女の姿が、絶えず筆者の脳裡に去來したということである。というのは、彼等が現代の科学主義・心理主義・感覺主義流行の波に押しまぐられて、人生の表面を歩もうとしているかに見えるからである。事実、古い教養主義は跡かたもなく崩れ去ったと見る人もある。しかし、少なくとも知識階級だけは時代の潮流に押し流されるべきものではないと思う。彼等がいやしくもインテリゲンチヤを以て自ら任じ、高き教養人として「宇宙間における人類の地位」を意識して歩もうとするならば、しばし立ち止って形而上の世界に想を馳せる必要がないであらうか。特に恋愛は凡

ての人の経験する、胸を躍らせる喜悅でもあり、悩みでもあり、つまづきでもある、人生の大きな課題とも云えるのであって、その形而上的な面にも耳を傾けておくことは決して単なる教養の蓄積ではなく、何等かの形で実際に役立つと信ずるものである。すなわち、単なる一応の理解の程度に読み了ったに過ぎないとしても、それがテーゼまたはアンテテーゼとなつて何時の間にか恋愛観の發展を遂げる場合もあるであらう。あるいはショーペンハウエルの恋愛論の「聴く者」となつて、自分の恋愛体験が処理されたり、やがてはそれを止場してより高次の世界に飛翔する場合もあるであらう。ニーチェもジンメルもケーベル先生も、その他多くの思想家はその思想巡礼の旅において、一度はショーペンハウエルの門をくぐつた。それは単なるいわゆる「ブルジョワ的教養」に過ぎないのではなく、恋愛に関する限り、一人一人が自分の現実問題と対決する生きた学問なのである。

(註一) Arthur, Schopenhauer, *Die welt als Wille und Vorstellung*, 1819.

(註二) *Gesellschaftslebe* を直訳して「性愛」とした邦訳もあるが、邦語の「性愛」は性欲本位の愛を意味するようで適訳とは云えないし、「男女愛情」とした邦訳もあるが、少し長すぎるくらいがあるので、意識ではあるが「恋愛」とした。

(註三) Eduard Grisebach, *Schopenhauers Sämmtliche Werke*, (Reclam) Bd. II, S. 1323 ff.

(註四) 恋愛は同性間にもある(同性愛)と見る学者もあるが、本論の原語は「異性間の愛」の意味であり。ショーペンハウエルもここでは、同性間の愛は論じていないので、男女間の愛に限ることにする。

(註五) 恋愛と結婚が女性の全部であるという思想が、今なお支配的であるせいか、「恋愛」は「婦人問題」の分野で論ぜられることが多い。



シヨールペンハウエルの恋愛論は、その巻頭が、十八世紀独逸の詩人ビュルゲル(註二)の次の詩句で飾られている。

汝等、高く且深く学びたる賢者たちよ。

汝等は考え、知れり。

いかにして、いづこ、またいつ、すべてが相偶するやを。

何が故に、すべてが、相愛して接吻(くちづけ)するかを、

汝等、すぐれたる賢者たちよ、それをわれに語れ！

何事がそこにてわれに、

また、いづこにて、いかにして、いつ、

何が故にわれにがし起りしかを、わが為に思ひ究めよ。(註三)

—ビュルゲル

さて右の詩句の意味は、前の五行は、深い学問をした賢者達に向って「恋愛一般の本質を詩人に説明して下さい」の意であろう。後の三行は、「恋愛にかけては、客観的にすべてを知り尽している筈の詩人である自分までが、自分の恋愛となると、そのとりこになってしまった、その特殊事情を探究して下さい」の意であろう。

つぎに何故にビュルゲルにこのような詩が生れたかは、彼の恋愛体験から説明され得るのではあるまいか。彼は妻の妹アウグステ (Auguste) に対する恋愛を、詩の中では彼女にモーリ (Molly) という別の名をつけて表現しているばかりでなく、彼女に対する情熱を絶ち得ず、不倫の関係を続けたと云われる。彼は自己の外なる魔力のようなも

ので嫌応なしに恋愛の渦中に引きづり込まれて行く、云わば苦しい恋をした訳で、それからの救を偉い哲学者に求めようとする悲痛な叫びが、この詩句となって現われたものであろう。偉人といえども、恋の為にはよろめくことは何も不思議ではないのであって、「クレオパトラの鼻の高さ」の周知な話もさることながら、日本でも、「孔子も倒るる恋の山」などの諺や、源氏物語の「女のことにてなむ、賢き人、昔も乱るるためしありける」や、何よりも「傾城」の語源そのものが雄弁にそれを物語っているといえよう。ショーペンハウエルも、「英雄も恋のために泣くのは恥ではない」と云って、その根拠を説明していることは後述の通りである。

つぎにショーペンハウエルが、この詩を冒頭に掲げた意味は凡そ二つあると思う。第一は、芸術的または音楽的構成をもつと云われる彼の哲学論文の序曲または序奏としての役割である。第二は、恋愛を云わば商買道具にしている詩人でさえも理解出来ない恋愛なるものの本質を、彼自身がビュルゲルの詩の中の「賢者」になって、これから説き明かすのだという、幾分稚氣を帯びた大哲学者としての自負心がほのめかされていると云えよう。

(註一) Bürger, G. A. (一七四七—九四) ハレ、ゲッテンゲンの両大学で神学および法学を学ぶ。彼の最大の文学的功績はドイツの譚詩の芸術性を高めた点にあると云われる。

(註二) Eduard Grisebach, Schopenhauers Sämmtliche Werke, (Reclam) Bd. II, S. 1323.

(註三) 佐久間政一訳『ショーペンハウエル人生論』北隆館、昭和二十四年、一五四頁。以下本論におけるショーペンハウエルからの引用は同書による。但し難解と思われる訳文・字句は平易なものに替えたところもある。

(註四) 彼の哲学は、芸術一般と同様、人生苦よりの解放(芸術的解脱)という役割を担っている。したがって、彼に傾倒するのは芸術家肌の人が多いと云われている。極端に云えば、哲学は彼にとっては「遊び」でもあったのである。彼は父の遺産によって生涯安楽に暮した人であり、哲学と愛大を連れての散歩が生活の全部であつたらしい。彼の云う「哲学教授連」とは肌合いが違つて、所論は極めて自由であり、純粋であつて、職業哲学者的臭味がないことも、私達が彼の恋愛論を考へて行く上において先ず念頭に入れておきたい。

本節は、<sup>(註二)</sup>この恋愛論を述べる第四十四章と前四章とは相関連して、ある程度まで統一的一体となすものではあるが、その関連關係を一々指摘したり参照したりして、この論文の進行を中断しないとの断わり書きである。その理由として、そういうことをしなくとも注意深い読者は気付かれることであるから、と彼は書いている。しかしその他に、そういうことをすれば學術論文としての体裁は整うとしても、文章の流れは中断され、読者に錯雜な論理關係を迫る労苦を強いることとなり、その結果、興味深く読ませて人生苦より解放(芸術的解脱)するという彼の哲學論文の目的の一半に支障を来すことになるからであらう。

そこで、前四章をも読まれることを読者におすすめしたいのではあるが、それはそれとして、ここでは筆者が前四章との項目的な関連だけを述べることにする。第四十章は序言であって、論文の進行關係に関する彼の弁明と読者への注意を述べているだけで、別に内容のある論文ではない。しかしその最後で、これまでの哲學者が全く度外視した問題、すなわち「時には最高の情熱にまで昂まる男女間の愛」の本質を明らかにすることは重要であり、人生行路の指針として哲學の倫理の部分に入れることが奇矯ではないと述べている。第四十一章は人間の「死」についての深い洞察である。恋愛の一要素である性欲が、個体の死と関連があることは、誰でも気付くことといえよう。第四十二章は「種族の生命について」であり、恋愛の一要素である性欲の關係から、子供が生れ、次の世代が構成され、種族の生命は維持されて行くことも同様である。第四十三章は「特質の遺伝」について論じている。恋愛の特徴の一つは、単なる性欲とは違って、何等かの意味で自分に適応した相手に対してでなければ發生しないということである。これを形而上的に見るならば、特定の男女の身体的・精神的特質が組み合わされて子孫に遺伝することによって、種族の發展を図ろうとする種族の意志の仕業であると見ることが出来る。

(註1) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1323.

(註2) 本論文は原典の「パラグラフを一節として進めて行くことにする。」

### III (註1)

本節は、恋愛の激情の自然性 (Naturgemässheit) と現実性 (Wirklichkeit) を説くのが、その要旨であると云えよう。<sup>(註2)</sup>「自然」とは多義な語であるが、ここでは漠然と包括的な意味で使われたと解して差支あるまい。すなわち人工の加わらないこと、云いかえれば必然的・客観的妥当性を有するの意に解しても、あてはまらると思う。また「自然」は「在りのまま」の意味から、「理想」・「文化」・「当為」に対立する概念としても用いられるが、ここでも、これらがすべてあてはまらると思う。以上のことから来る一つの結論は、恋愛は必然的にはとばしり出るものであって、社会制度の力などでは到底くい止めることは出来ないということである。要するに「自然性」についてこれこれ理屈を云うよりも、日本の諺「恋に師匠なし」が最もよく恋愛の自然性を説明している。つぎは「現実性」であるが、これも哲学的厳格性をもって考えるとなかなかむずかしい概念で、哲学者の間でも立場によって見解が一定していないようである。形式的には、可能的存在や、単なる想像・思考・誤想などの対象に対し、真実に在りと断定されたもの、すなわち偽的存在に対し真正の存在と定義されている。しかし、恋愛論は人生哲学の一分野であって、ショーペンハウエルも純粹哲学の場合のように、一々の用語に哲学的厳格性を持たせて使ったと考えるのは誤りであろう。そこで、ここでは哲学的に深く詮索しなくとも、前述の定義から理解される程度でよいと思う。

ショーペンハウエルの叙述の順序からすれば本節の冒頭で、東西古今にわたり、一切の戯曲・詩・小説の主題が恋愛であること述べている。次に、その最も成功した作品で、不朽の名声を得たものとして『ロミオとジュリエット』・『今様エロイーズ』<sup>(註3)</sup>・『若きヴェルテルの悩み』の三つを挙げている。

次に、激情的愛の現実性を否定した二人の所説を挙げて反駁する。一人はラ・ロシュフコー<sup>(註四)</sup>で、誰でも話はするが実際に見たことのないものとして、幽霊 (Gespens) と激情的愛とを同一に取扱って激情的愛の存在を否定するのであり、他はリヒテンベルヒ<sup>(註五)</sup>で、その論文『愛の力について』(Über die Macht der Liebe) において、激情 (Leidenschaft) の現実性と自然性を否定する。この二人の説を反駁するシヨールペンハウエルの根拠は次の通りである。

『何となれば、人性の自然とかけ離れた而してこれと矛盾するものが、——即ち抛り所なくして画かれた戯画のようなものが、——あらゆる時代にわたって、詩的天才者から倦むことなく描写せられ、人類から不変の興味をもつて迎えられるなど云うことは、あり得べからざるものであるから。』

その根拠を更に強化するために、「美」には「真」<sup>(註六)</sup>がつきものであることを述べたボアローの次の言葉を引用する。

真なるものより美わしいものはなく、

真なるもののみが愛らしいのである。

Rien n'est beau que le vrai; le vrai seul est aimable.

つまり、恋愛が古来連綿として芸術家の対象となり、人類の興味の対象となつて来たからには美でなければならず、美であるからには真実でなければならぬ、と云う論法である。

以上は、古来芸術家の対象となつて来たという事実から間接的に恋愛の現実性を論証したわけであるが、次の段では恋愛の現象形態の面からその現実性を実証する。その現象形態の実例は、激情の度の激烈なものから軽微なものへの順序で挙げられている。その最も激烈なものは、恋愛のために生命を失う場合であつて、シヨールペンハウエルによれば次の如くである。

『……、或る事情の下では、その激烈さにおいて、他の一切の激情を凌駕するものとなり、一切の顧慮 (恥・外聞など——筆者註) を排斥し、信ずべからざるほどの力と忍耐とをもって、あらゆる障害を打ち破り、遂にはその

満足のためには、生命さえも躊躇することなく賭し、この満足が全く拒まれる場合には、生命を投げ出すようにするものである。ヴェルテルやヤコポ・オルテス(註七)のような人々は、単に小説の中に存在するばかりでなく、歐洲においては、この種の人間が、一年に少くとも六人位はあらわれる。然しこれらの人々は、人に知られざる死によって失われる。(註九)」

次は、恋愛の激情のために、精神病院に入る人達であって、その数は前者よりも更に数が多いという。その次は、外界の事情に妨げられた恋人同志の情死である。これに関連してショーペンハウエルは次のように述べている。

『相互に愛し合っている事が確実であって、この愛を享樂することにおいて、至上の幸福を求めようと期待する恋人達が、何が故に、極端な手段にうったえても、あらゆる面倒な關係を押しつけ、如何なる困難を凌いでも、生存を続けて行こうとはせずに、彼等にとって至上の幸福を、彼等の生命とともに捨てるのか、私にはどうも説明がつかない。』

日本流に云えば、橋の下に寝ようとも、三度の飯を二度にしようとも、添い遂げたらよさそうなのであるのに、どうも不可解である、といった調子である。これは恋愛の現実性を証明するという本論の進行から見れば、明らかに彼特有の脱線であり、低徊であり、息抜きである。森羅万象・一切合切を、自己独自の哲学から説明し切るという大自負心をもったショーペンハウエルが、ここで余計なことをして兜を脱いでいるのは何故であろうか。得意とする方面に脱線して行くのが普通人であるのに、力の及ばないところに脱線して行くところに、哲学者らしい正直さがよく現われていると思う。「筋の通らぬ・訳のわからぬことをするものだ」と高所から冷笑している意味合いもないとは云えないのであるが、「存在するものは合理的なり」として、不合理不可解に見えるものも、合理的に究明しようとするのが、哲学の態度であるからである。厭世主義者でも虚無主義者でも、若し自分の思想に忠実であるならば、あるいはその思想が本物であるならば、当然に自殺への過程を辿ると考えるのは、幼稚な・粗雑な論理であるらしい。

事実典型的な厭世主義者と云われ、人生の空の空なることを説いたシェーペンハウエルが、人一倍長生きしたがったのである。幸福追求主義者の方が、かえってそれに終止符を打つ死を選ぶとは、どうしても説明がつかなかったわけである。

最後に、恋愛の激情の程度の低いものや萌芽的なものは、日常茶飯事的に目の前に見ているし、老人でない限り、自分の心の中にも体験していよう、と云って恋愛の現実性の証明を終わっている。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1323 ff.

(註二) シェーペンハウエルの哲学は体系的なのではあるが、前述のように芸術の役割をも担っているので、行文そのものは旋律的な波を打ち、<sup>ハフド・デー</sup>主題が再三再四変曲されては繰り返されたり、皮肉・諷刺・揶揄を織り込んだり、息抜きに脇路へそれたり、読者からの予期される反対論を載せて、それを弁駁したり等々で、<sup>バララフ</sup>節毎の要旨をつかむことは困難な場合が多い。しかし、読者の便宜を考えて、筆者が強いてそれをしてみることにする。

(註三) neue Heloise, ルソーの小説で、今日では余り知られていないようであるが、十八世紀のベスト・セラーと云われる。

(註四) La Rochefoucauld, 1613—1680. フランスのモラリスト、格言作家。岩波文庫に、内藤濯訳の彼の『箴言と考察』がある。

(註五) Lichtenberg, 1742—1799, ドイツの物理学者、著述家。ゲッティンゲン大学教授。格言作家でもあった。

(註六) Boileau—Despreaux, 1636—1711. フランスの詩人、批評家。

(註七) Werther, ゲーテの有名な小説『若きヴェルテの悩み』の主人公。恋の為に死す。尚そのモデルとなった実在の人イェルザレム (Jerusalem, 1747—1772, ドイツの法律家) が失恋自殺したのである。

(註八) Jacopo Ortis, イタリアの詩人、作家フォスコロ (Foscolo, Ugo, 1778—1827) の小説『ヤコポ・オルティスの最後の書簡』の主人公で、恋のために死す。

(註九) 有名な言葉であるらしい。ラテン語で次の通り書かれている。sed ignoti perierunt moribus illi.

四 (註一)

本節は、彼が恋愛を論ずることの云わば弁明である。前節で述べたことから解るように、恋愛は現実の事実であり、人生の重大事であるにもかかわらず、それを詩人にまかせておいて、彼以前の哲学者が殆んどこれを考察せず、加工しない素材のままに残しておいたことは不思議である、と彼は云っている。<sup>(註二)</sup>従って、この人生の現実の重大事を、哲学者である自分が取り挙げたことは、少しも不思議ではないという。これが弁明の第一である。

次は、彼以前に恋愛を論じた少数の哲学者とその著作を挙げる。古来この問題に最も多くかかわりあったのはプラトンであり、それは『饗宴』と『ファイドロス』(Phaedrus)にあるが、神話や寓話や洒落であったり、大部分はギリシャの男色 (Knabenliebe) に関したものだ<sup>(註三)</sup>と彼は云って問題にしない風である。つぎに恋愛を論じ学者ルソー

(書名『不平等について』・カント(論文名『美と崇高との感について』)・プラットネル(書名『人類学』)等の所説は、それぞれ、全くの間違であったり、不十分であったり、皮相な見方であったり、専門的知識を欠いていた<sup>(註四)</sup>り、誰が見ても浅薄であったり、等々で取るに足らないとして、鎧袖一触に片附けられている。但しスピノザの定義だけは、極めて素朴的であるので、気晴らしに引用するだけの価値はあると皮肉って、それを掲げる。<sup>(註五)</sup>そういうわけで恋愛論の先輩はいないと云ってもよいのであり、したがって自分の恋愛論は先輩の示唆などによったものではなく、自己独自の立場から見た本格的な世界最初の恋愛論なのである、というのが弁明の第二。すなわち、本論序言(本論集二八頁)で述べた言葉によれば、「恋愛」が彼独自の「形而上学的要求」の「わな」にかかったというわけである。彼の表現によれば次の通りである。

『こんな訳だから、私にはそれを利用したり、論難したりすべき先輩がない。この問題は、客観的に私のもとに押し寄せて来て、自ら進んで私の世界考察の連鎖のうちに入ったものである。』



次は、目下恋愛のとりこになっていて、それを崇高・靈妙な言葉で表現しようとしている人々から見ると、自分の見解は余りにも形而下的 (physisch) で物質的 (materiell) に見えるために、称讃されとは期待していないが、根柢においては、自分の恋愛論は形而上的であり、更に超絶的 (transcendent) なのだ、というのが弁明の第三である。

最後に例のごとく一寸脱線して、目下恋愛のとりこになっている人達を皮肉る。即ち、彼等を感じさせて恋歌 (Madrigal) や短歌 (Sonett) を作らせている対象物 (恋の相手である若い男女) が、もう十八年も年とっていたなら一瞥をも与えられなかった、つまり肉体的若さを基礎に生れた歌が、芸術の名に値するか、というわけである。

ショーペンハウエルは前節の末尾では「老人でない限り」と云い、本節の終りでは「もう十八年も年とっていたなら一瞥をも与えられなかった」と云い、また後述の箇所でも再三、恋愛は若人の独占物であるかのような表現をしているが、これには異論がある。というのは、恋が老年にもあることは、多くの学者の唱えるところであるばかりでなく、現象形態 (いわゆる「老いらくの恋」やロマンス・グレーなど) としても見られるからである。しかし、この異論を彼に向けるならば、「自然は飛躍せず」の原理を持ち出して、老年のものは「残り火」として片附けられてしまふであらう。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit. Bd. II, S. 1324 ff.

(註二) 同様のことを、ジンメル (G. Simmel, 1858—1918) も次のように云っている。「しかし哲学の怠慢は就中、愛情の問題において最も著しい。—哲学は愛情というものが、まるで何か片手間のもの、主観的な魂の冒険のようなものであって、真剣にまた厳密に具体的に論究するに足りぬものだと考えているようにさえ見える。」(高橋訳『ジンメル恋愛論』玄海出版社、昭和二十八年、一八一頁。)

(註三) Ernst Platner (1744—1818) ドイツの生理学者、哲学者、人類学者。

(註四) これらの短評が当を得ているかどうかについては、それらの著作について筆者が未だ研究していないので、批評の資

格を欠くことを遺憾とする。

(註五) スピノザの『倫理学』<sup>エチカ</sup>の用語(ラテン語)で、次の通り書かれている。(同書四、定理四十四解説)

Amor est titillatio, concomitante idea causae externae.「恋愛とは外部にある原因の觀念に伴って生ずる一種の快樂である」その意味は、自分の外にある特定の異性を見ることによって、ある觀念(表象)が生れ、その表象をめぐって生ずる快樂が戀愛だというのであらう。この純真・素朴な戀愛の清純さを味わいたい人は、室生犀星の戀愛詩「朱の小箱」など如何であらうか。

## 五 (註一)

本節では、前節末尾の、結局は肉体的の若さが戀愛詩を作らせるのだという彼の主張の根拠から説き始めて、次第に恋愛の本質へと向っている。その根拠は彼によれば次の通りである。

『何となれば、すべての恋愛は、いかにそれが靈妙な(ätherisch)風を装っていようと、その根柢は性的本能のうちにのみあるもので、しかも、それは一層特定の・特殊的な、更に最も嚴密な意味において個体化された性的本能にすぎないものだからである。』

右の「靈妙な風」とは、人がよく云う「恋をすると誰でも詩人になる」、云わば恋愛につきまとうロマンテシズムのこと、その根拠については、次の節で述べている。要するに、彼によれば、恋愛の本質は個体化された性的本能(individualisierter Geschlechtstrieb)で、「個体化された」とは、何等かの意味で、自己に適應した特定の異性に向けられた、の意である。

次は、恋愛事件が、古来、劇や小説においてばかりでなく、現実の人間社会に混乱や転倒や転覆と雑沓や喧騒と憂

慮や困苦等々を現出させている実状の詳細な描写である。これで見ると、シヨールペンハウエルが生きた一世紀余り前の西欧と現代日本と殆んど変化はないようであるから引用を省略するが、彼によれば問題の真相は極めて簡単で、『どの「太郎」も自分の「お花」を見つけ出す』だけのことだと云う。「お花が太郎を見つけ出す」方は脱れているのは、当然のこととして省略したと見るよりは、彼の男性中心的 (androcentric) な人間観の無意識的な仕業であり、又当時の西欧社会が男性淘汰 (male sexual selection) の社会であったことの反映と見るべきであろう。

この辺り、シヨールペンハウエルの論調は、皮肉な波を打たせながら、今度は、「田吾作」が「お鍋」を見つけ出すという『このような一小事が、何故にこれほどの重大な事柄になって、良く統制された人生の中へ、絶えず攪乱と紛糾とをもたらすのであろうか?』と自問する。しかし、小事が何故に大事を惹き起すのかというこの問題について真面目に研究する者にとっては、真理が漸次に解答を示してくれる、と彼は云う。その解答は、彼が好きでよく見た芝居になぞらえて、次のように与えられている。

『問題となっているこの事件は、実は前に考えたような一小事では決してない。むしろ事件の重要性は、行為の真面目さと熱心さに完全に一致しているのである。あらゆる情事の窮極の目的は——それが低い靴 (ギリシャの喜劇用の) で演ぜられようと、高靴 (同上悲劇用の) で演ぜられようと——人生における他の一切の目的よりも、実際一段と重要であり、したがって人々がこの目的を追求する際の深い真面目さに、十分値しているのである。というのは、これによって決定されるものは、次の時代の構成という大事件だからである。われらが舞台から退いた時に (死んだ時を指す——筆者註)、新に登場する劇の人物は、この些細に見える情事によって、その存在に關しても、その性質に關しても、ここできちんと決定されるのである。未来の人間の存在が、一般にわれらの性的本能によつて条件づけられるように、これらの人間の本质も、性的本能満足の場合における個人的選択、すなわち恋愛によって全く規定され、且これによって、どの点においても変更できないように確定されるのである。』

以上は、旋律味豊かな進行の中に、彼独特の皮肉や諷刺を織りまぜた美文である。これを要約すれば、恋愛の窮極の使命は人類の次の世代の構成、(die Zusammensetzung der nächsten Generation) をよりよいものにするという人類の最重要事であり、そのためには、何等かの意味において、<sup>(註1)</sup> 自分と最も適応した異性の相手との同食が必要となり、そうした異性選択の真剣さをめぐって、前述のような人間社会の混乱・喧騒・紛糾・憂苦等々を惹き起すわけである。この選択の個性化ということが問題を解く鍵 (Schlüssel) なのであって、この鍵を使って更に観察して行くと、恋愛の程度の相違は、選択の個性化の程度の高低から生ずる事が分るであらう、と云って本節を終わっている。

性交の相手を選択することが、生物学者ダーウィン以来、生物進化の一つの原動力として、雌雄淘汰 (sexual selection) の名において唱えられ、これを社会進化にも適用した多くの社会学者が出たことは周知の通りであり、アメリカ社会学の始祖ウォードなども力説するところである。しかし、シューペンハウエルのはダーウィンに先き立つこと数十年であることを、注意しなければならない。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1325 ff.

(註二) この意味については、シューペンハウエルが後に詳論するところである。

(註三) 「太郎」はハンス (Hans) で、ヨハネス (Johannes) の短縮形、英語のジョンに相当する、ありふれた男名で男全体を代表する。「お花」はグレート (Grete) で、マルガレーテ (Margarete) の短縮形、英語と同様ありふれた女名で女全体を代表する。しかし、ハンス・ウント・グレートと二つを並べた時、若い男女を指すことは日本語と同様である。序に、両者は、英・独ともギリシヤ語に語源があり、男は「エホバ (Jehova) 恵み給え」であり、女は「真珠 (margaron) であることに注意したい。尚、この表現は、日本語の「太郎とお花」と同様に、卑俗なものとして高所から冷笑するという風な意味合いを持っているのであるが、その意味合いをシューペンハウエルはもっと強調したかったらしい。しかし余りに卑俗な語を用いることは、大哲学者の風格からして、遠慮したらしいことは、これに関す

る脚註 (E. Grisebach, op. cit., S. 1326) から伺い知ることが出来る。そこでは、「……………好意ある読者諸賢はアリ  
ストファネス風の言葉に翻訳しなければならない」と、云っている。それにふさわしい言葉として、日本語の場合に  
は好都合にも、既成の用語があると思う。「田吾作」と「お鍋」がそれである。

## 六 (註)

本節では、前節で一寸触れた、恋愛につきまとう云わばロマンテシズムの根拠を求べる。彼の表現によれば次の通りである。

『この事件においては、他のすべての事件におけるように、個人の幸・不幸が問題であるのではなく、未来の人類の生存とその特殊な性質とが問題であり、従って個々人の意志は、より、高度な力を得て、種族の意志として現われて来るのであるが、事件がこのように重大であるために、恋愛における感動的なものや、崇高なものや、歓喜と苦痛との超絶的なものが生れるのであって、そうした無数の実例を描写して、詩人達は数千年来倦むことを知らなかったのである。どんな主題でも、興味の点で、これに匹敵し得るものはあるまい。』

以上を要約すれば、恋愛におけるロマンテシズムの基礎は、事件の重大性であるというのである。この場合の基礎とは目的観の上に立つのであって、つまり、当事者にロマンテシズムを臨ませることによって、種族の霊は恋愛の重大性を当事者に教え込もうとしているわけなのであり、これについては後節で度々詳論される。しかも、この「教え込み」は成功し、『金色夜叉』の「貫一」が世の共感を呼び「お宮」がけなされ、総じて金銭結婚や政略結婚が卑しむべきものとされている、ことに現われていると思う。尚、目下恋愛をしていない人でも、詩人や文人の作品に対して共感をおぼえるのは、そうしたロマンテシズムの臨む基盤が一人一人の心の中に準備されているからである、とい

うことについても後述される。

(註) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1327.

## 七 (註)

本節では、前節まで述べてきたことを、シヨ―ペンハウエル独自の哲学体系から略述し、その立場から更に恋愛本質論を展開している。彼は云う。

『個人の意識のうちに、一般に性欲としてあらわれ、異性のある一定の個人に向っていないものは、それ自身だけを取って現象を離れて見れば(形而上的に見れば―筆者註)単に「生きんとする意志」に過ぎないのである。』我々は通常、性欲を本能とか衝動とかの範疇でとらえているが、そうした態度は科学の立場に立つものに過ぎない。形而上的に見るならば、性欲とは個体を超えて(自分が死んでも)生きんとする意志であると云えよう。シヨ―ペンハウエルが、世界の根柢を盲目的生存意志(Blinder Wille zum Leben)としたことは周知の通りであり、それが人間にも適用されたわけである。

前段は性欲一般についてであるが、次に特定の個人に向けられた性欲については次の如く論じている。

『しかし或る一定の個人に向けられた性欲として、意識のうちにあられるのは、それ自身だけで、或る特定の個人(将来の生児を指す―筆者註)として生きようとする意志である。この場合には性欲は、それ自らでは主観の要求に過ぎないのであるが、甚だ巧みに客観的讚美(特定の異性に対する―筆者註)という仮面をかぶり、それ意識をだますことを知っている。これは、自然が自己の目的のために、この戦術を必要とするからである。』  
「あの人と一緒になるならば、きつとよい子が生れるであろう。そのよい子として生きたい」――これが特定の個

人に向けられた性欲の形而上の意味であり、恋愛の本質なのである。後段のことは、日本流に云えば「あばたもえくぼ」として、英諺では「恋は相手を美化す」(Love idealizes its object)とか、「恋は欠点を見ない」(Love sees no faults-)などで、また、スタンダールの恋愛論の著明な中心概念である「結晶作用」として、広く知られていることである。しかしショーペンハウエルの場合、注意すべき点が二つある。一つは、それが当事者に対して、主観的独善ではなく、あくまで客観的讚美 (objektiv Bewunderung) として現われるということである。他はそれが真実に仮面<sup>マスク</sup>なのであって、そのことは自然の欺術によるということである。人間は不正直でも、自然こそは絶対正直であろうと思われるのに、なぜ、欺術や偽瞞を使うのであろうか。自然が苦肉の策として、偽瞞政策をとらざるを得ない理由については第九節以下に詳述される。ここで彼がこのことに触れたのは、恋愛における客観的讚美 (ロマンテシズム・愛) なるものは、自然の用いる欺術に過ぎず、従って二次的なものに過ぎず、恋愛の主要事は次に述べるように肉体的享樂 (physische Genuss) であることを云いたいがためである。

つぎは、恋愛においては、当事者間の愛 (客観的讚美) よりも「よりよき子」の方が、高次的であり重要であることを、現象面から証明する。彼によれば次の通りである。

『しかし、この讚美がいかに客観的に見え、その上、崇高な色彩を帯びているように見えるにしても、あらゆる恋着なるものが、ある一定の性質を有する個体を産み出すのを目的としていることは、恋着の場合における主要事が、相互の愛などではなくて、相手を所有すること、すなわち肉体的享樂そのものであることによって、先ず第一に確認されるのである。』

以上のような主張、簡単に言えば愛よりも性に重点がおかれていること、を示す社会現象を二つの方面から、彼は次に挙げてゐる。第一は、相互の愛が確實であっても、肉体的享樂が出来ないことがはっきりすると、決して満足は得られず、否むしろ多くの人々は自殺したという。或る種の失恋自殺・情死などを指すのであろう。第二は、強烈な

恋をしている人は、相手の愛が得られなくとも、肉体的享樂で満足する場合である。その事例として彼は、強制的結婚（金銭結婚や政略結婚などを指すのであろう）・高価な贈物などによって購われた婦人のおなさけ（Günst）による場合・進んでは強姦的行為による場合などを挙げている。

次は息抜きに一寸脱線して、その脱線したところから再び恋愛の本質へと論を進めて行く。気高い・多感な人達、特に目下恋をしている人達は、以上の見解に対して、粗野な現実論だと大声をあげて非難するでもあろうが、自分の方が正しいとして次のように云う。

『何故かと云えば、次の世代の個性を正確に定めるといふことの方が、彼等の熱狂的な感情や、空想的なシャボン玉みたいな考え方よりも遙かに高い・遙かに価値ある目的を持っていないだろうか。この地上の目的のうちで、これ以上に重要で、これ以上に大きな目的が他にあり得るだろうか。激しい愛情が感じられる時の深刻さや、それが現われ出る時の真面目さや、その範圍のうちに起きたり・その機縁となったりする些細な事に彼等が与える重い意味などは、皆その事の重大さに相当しているのである。この目的を真の目的だと見る限りにおいてのみ、愛の相手を得るための面倒なことや、限らない骨折りや、労苦などが、事柄に相当していることが分るのである。』

以上に続けて、次の世代の個性は今の世代の恋愛の中にすでに生動していると説き、そこからまた恋愛の形而上的意味を端的に次のように述べる。

『恋する二人の間にいや増して行く愛情は、本来、二人が生もうとする・又生むことの出来る新しい個体の「生きんとする意志」に外ならない』

次に、以上の二人の恋愛関係の発展としての所謂ベター・ハーフ的思想を述べ、そうしたものも結局次の世代と関連するものとして次のように説明される。

『彼等二人は、真実に合体し融合して唯一つのものとなり、この一つのものとしてののみ尚生き続けようとする



憧憬あこがれを感じる。この憧憬は彼等の間から生れたもの（子供）において、満足を得るのである。すなわち、その中には、二人の遺伝的特質が、一つのものに融合帰一して生存し続けるのである』

以上と正反対の男女間の嫌悪も、同様に次の世代との関連から、次のように説明される。

『反対に、男女間の相反的な・決定的な・執拗な嫌悪なるものは、若し彼等が子供を生むなら、それは組織の悪い・それ自身不調和な・不幸なものになるという事の象徴なのである。』

（註） Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1328 ff.

Katsuo Ishizuka

## **A Study of A. Schopenhauer's "Metaphysics of the Sexual Love"**

### **Résumé**

In the first place, the author makes out a brief genealogy of the views of the sexual love in times past, for helping the understanding of this theme.

In the next place, the author states the methodology of this study, and for the young intellectual readers preaches the necessity of giving thought to the metaphysical side of the sexual love.

Schopenhauer proves the naturalness and actuality of the passion brought with the sexual love.

Though it would assume a show of an ethereal appearance, he says, at the basis of it lies the individualized (that is, directed towards a specific person suitable to each individual) sexual instinct.

According to him, the reason why the sexual love brings about confusion, clamor and sorrow to the human society, indicates that it is one of the greatest things in the human society, because the existence and quality of the next generation might totally be determined by the selection of partner at the time of satisfying the sexual instinct.

According to him, the pathetic, the sublimity and the transcendency of delight and pain, followed about with this affair, which, since thousands of years ago, innumerable poets have tirelessly represented, depend upon the importance of this affair.

According to him, the increasing affection between two lovers is, from metaphysical view point, the "Will to Live" of the new individual which they could and might beget.